

東白川村 おもしろポイントマップ



ふるさと、東白川村。私たちが暮らしているこの村には、素晴らしい先祖からの贈り物がたくさんあります。

それは、いまも変わらぬ自然であり、日々の暮らしに息づく生活習慣であり、地名であり、それにまつわる伝説や民話です。

ひとりでも多くの方に東白川村のことを知ってもらおうと、これらを「おもしろポイント」にまとめてみました。

たくさんのお年寄りみなさんにお会いし、お話を聞く中で、
“そういえば昔誰かにそんな話を聞いたことがあった”
“えっ、そんな所があったの”ということがたくさんありました。

ほんとうは、この冊子でそうした話を全部収録したかったのですが、紙面の都合で23のポイントに絞らせていただきました。
今回紹介できなかった分については、きっと近いうちにまとめて、みなさんに紹介したいと考えています。

さて、みなさん。四季の香りがいっぱいの東白川村。
おとどけた「おもしろポイント」をポケットに、ふるさとウォッチングに出かけてみませんか。

マークの見方

見ごろ行きごろ

春 夏 秋 冬

ポイントの種類

石碑 石碑ポイント

歴史
伝承 歴史・伝承ポイント

神社 神社ポイント

景観 景観ポイント

伝説 伝説ポイント

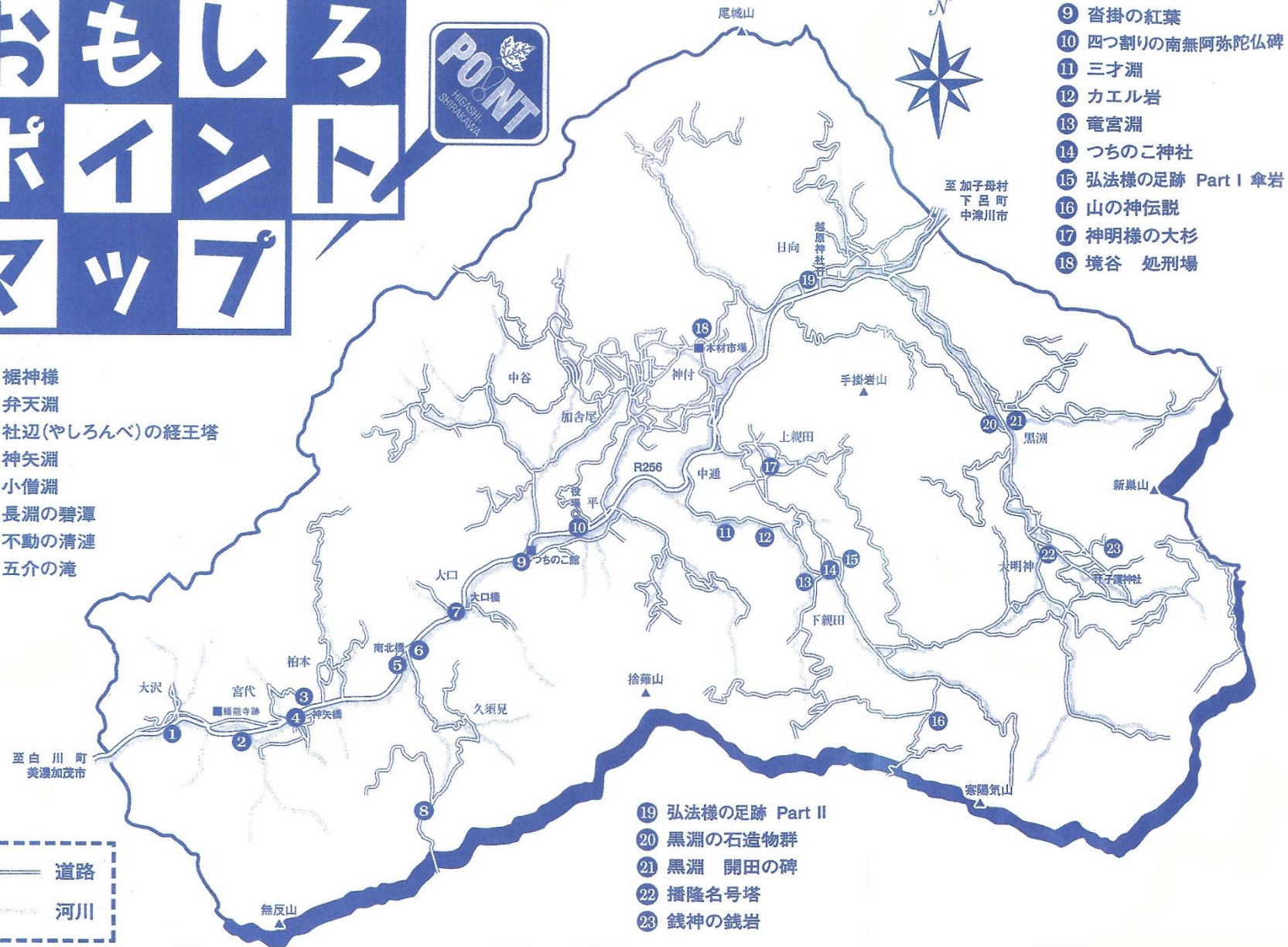
東白川おもしろポイント 目次

①	裾神様 すそがみさま	・ ・ ・ ・ ・	P1
②	弁天淵 べんてんぶち	・ ・ ・ ・ ・	P2
③	社辺（やしろんべ）の境王塔 きょうおうとう	・ ・ ・ ・ ・	P3
④	神矢淵 かみやぶち	・ ・ ・ ・ ・	P4
⑤	小僧淵 こそぶち	・ ・ ・ ・ ・	P5
⑥	長淵の碧潭 ながぶち へきたん	・ ・ ・ ・ ・	P6
⑦	不動の清漣 ふどう せいれん	・ ・ ・ ・ ・	P7
⑧	五介の滝 ごすけ たき	・ ・ ・ ・ ・	P8
⑨	沓掛の紅葉 くつかけ こうよう	・ ・ ・ ・ ・	P9
⑩	四つ割りの南無阿弥陀仏碑 よつわり なむあみだぶつひ	・ ・ ・ ・ ・	P10
⑪	三才淵 さんざいぶち	・ ・ ・ ・ ・	P11
⑫	カエル岩 いわ	・ ・ ・ ・ ・	P12
⑬	竜宮淵 りゅうぐうぶち	・ ・ ・ ・ ・	P13
⑭	つちのご神社 じんじゃ	・ ・ ・ ・ ・	P14
⑮	弘法様の足跡 Part I 傘岩 こうぼうさま あしあと かさいわ	・ ・ ・ ・ ・	P15
⑯	山の神伝説 やま かみでんせつ	・ ・ ・ ・ ・	P16
⑰	神明様の大杉 しんめいさま おおすぎ	・ ・ ・ ・ ・	P17
⑱	境谷 処刑場 さかいたに しよけいじょう	・ ・ ・ ・ ・	p18
⑲	弘法様の足跡 Part II こうぼうさま あしあと	・ ・ ・ ・ ・	P19
⑳	黒淵の石造物群 くろぶち せきぞうぶつぐん	・ ・ ・ ・ ・	P20
㉑	黒淵 開田の碑 くろぶち かいでん ひ	・ ・ ・ ・ ・	P 2 1
㉒	播隆名号塔 ばんりゅうみょうごうとう	・ ・ ・ ・ ・	P 2 2
㉓	銭神の銭岩 ぜにかみ ぜにいわ	・ ・ ・ ・ ・	P 2 3

おもしろポイントマップ



- ① 裾神様
- ② 弁天淵
- ③ 社辺(やしろんべ)の経王塔
- ④ 神矢淵
- ⑤ 小僧淵
- ⑥ 長淵の碧潭
- ⑦ 不動の清漣
- ⑧ 五介の滝



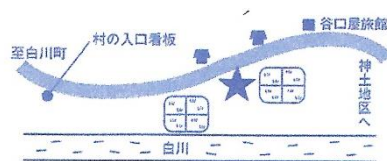
- ⑨ 沓掛の紅葉
- ⑩ 四つ割りの南無阿弥陀仏碑
- ⑪ 三才淵
- ⑫ カエル岩
- ⑬ 竜宮淵
- ⑭ つちのご神社
- ⑮ 弘法様の足跡 Part I 傘岩
- ⑯ 山の神伝説
- ⑰ 神明様の大杉
- ⑱ 境谷 処刑場

- ⑲ 弘法様の足跡 Part II
- ⑳ 黒淵の石造物群
- ㉑ 黒淵 開田の碑
- ㉒ 播隆名号塔
- ㉓ 銭神の銭岩

ご 加 ・ 大 沢 の 県 道 沿 い に ひ っ そ り と 祀 ら れ た 小 さ な 祠
がある。

地 元 の 人 々 か ら 裾 神 様 と 呼 ば れ る こ の 神 社 は、 昔 か ら 婦 人 病 な
ど に 御 利 益 が あ る と い わ れ て い て、 お 参 り に 訪 れ る 人 が い ま も 後
を 絶 た ない。

※道下にあるので見落とし注意



祭礼は毎年4月29日の緑の日に行われています。



昔 々 の こ と じ ゃ っ た。 向 山 の 奥 に 住 ん で お っ た 若 い 衆 が 弁 天 淵
を 通 り か か る と、 淵 が 真 黒 に な る ほ ど に 魚 が 群 れ て い た そ う な。
弁 天 淵 で 魚 釣 る こ と は 固 く 禁 じ ら れ て お っ た が、 あ ま り に も た
く さ ん の 魚 だ っ た の で、 若 い 衆 は つ い そ そ か さ れ て 糸 を た れ て
し ま っ た ん じ ゃ。 そ れ は そ れ は た く さ ん 釣 れ た そ う な。 や が て 持 っ
て い た ビ ク が い っ ぱ い に な り、 こ れ 以 上 は 釣 っ て も 持 ち 帰 れ な く な
っ て し ま っ た の で、 ま だ ま だ 釣 り た い 気 持 ち を 抑 え て 若 い 衆 は
家 路 に つ い た。

さ て、 家 に 戻 っ て か ら が た い へ ん じ ゃ。 釣 っ て は い け ない 魚 だ け
れ ど も こ れ だ け 釣 れ る と、 誰 か に 自 慢 し た く な る。 若 い 衆 は つ い に
我 慢 し き れ な く な っ て 近 所 の 衆 を 呼 び 集 め、 得 意 げ に ビ ク を 開 け
た。 す る と ど う だ ろ う。 ビ ク の 中 に は ぎ っ し り 枯 れ 葉 が 詰 ま っ て い
る で は な い か。 こ ん な は ず は な い と、 ビ ク を 逆 さ ま に し て み た が や
っ ぱ り 出 て く る の は 枯 れ 葉 ば か り。 集 ま っ て き て い た 人 々 の 怒 る ま
い こ と か。 以 来、 そ の 若 い 衆 は、 み ん な か ら 大 嘘 つ き 呼 ば わ り さ れ
た そ う な。

弁 天 淵 は、 い ま で は 笹 竹 の 奥 に
ひ っ そ り と 森 の 影 を 映 す だ け に な
っ て し ま っ た が、 昔 は た く さ ん の
魚 が い て、 亀 も よ く み か け た そ う
だ。 こ の 亀 は 弁 天 様 の お 使 い で、
甲 羅 の 下 側 に 「 金 」 の 文 字 が 刻 印 し
て あ っ た と か。

ひ ょ っ と し て い ま も ど こ か に 隠
れ て い る か も。



五加・宮代の田んぼの中に真っ二つに折れた経王塔がある。

この経王塔は、昔、蟠龍寺が没したときに経典などをまとめて納めたものといわれているが、その後、この周辺に流行病やけが人などが相次いだことから、組の人たちが供養するようになったという。ただ、この経王塔は昭和32年の伊勢湾台風の際に強風によって真っ二つに折れてしまい、現在は一見したところ2本の石碑が並べて立てられているように見える。

これは伊勢湾台風がいかにすごかったかを後世に伝える貴重な物証でもある。

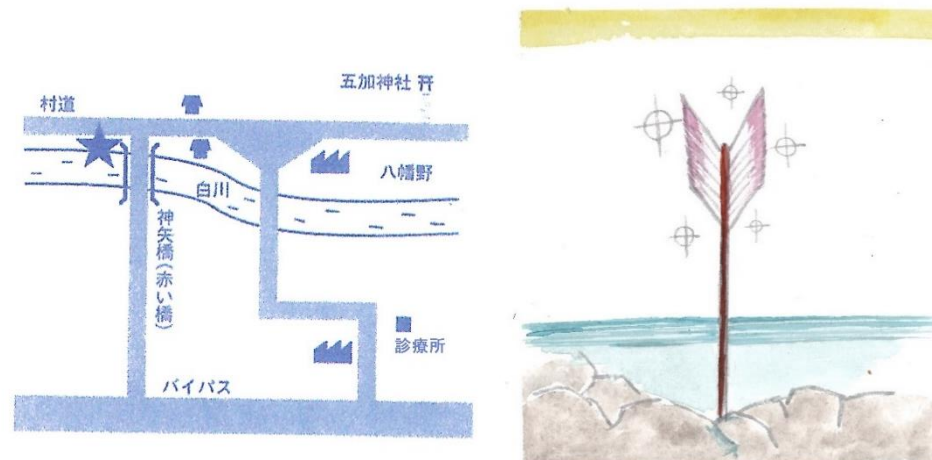


昔、京の岩清水八幡宮の客人が八幡神社普及のため全国を行脚しておった。その途中、この村に立ち寄った時のこと。ふと白川の淵を覗くと一本の白い矢が浮いていた。

不審に思ってしばらくその矢の行方を追っていると、やがて矢は流れに逆らって川上に上りはじめたではないか。そんなはずがあらうことかと、客人が目を疑ったその瞬間、矢は岸に突き刺さりこうこうと光り輝きはじめたのだった。

これは神のお導きに違いない。そう考えた客人は、そこを八幡神社鎮座の地として開き、お祀りになったのだそう。

この淵を神矢淵と呼び、神社を八幡野神社、別名白羽之神社と呼ぶのはここからきているという。また、この付近の川原は八幡野とも呼ばれている。



ご か なんぼくばし かりゅう こぞぶち よ ふち
五加の南北橋の下流。小僧淵と呼ばれるこの淵には昔、「とちろんべ」(河童)が棲んでいたという。

あるとき ふたり てら こそう となりむら てら つか い
ある時のこと、二人のお寺の小僧が隣村のお寺へお使いに行った
かえ みち ひ あつ ひ かわ はい あそ
帰り道。その日はとても暑い日で、たまらず川に入って遊んでいたところ、突然「とちろんべ」が現れて、二人の小僧の足をくわえて水のなかへ引き込んでしまったという。

いまでいえば しょうがく ねん としごころ おきな こそう
いまでいえば小学1・2年くらいの年頃の、まだまだ幼い小僧
ひげき あわ むらびと ふち ちか なむあみだぶつ ひ た
の悲劇、これを憐れんだ村人は、淵の近くに南無阿弥陀仏の碑を建てて供養した。

じけんいらい ふち だれ こぞぶち よ
この事件以来、この淵のことを誰からともなく「小僧淵」と呼ぶようになったのだそう。



たいしょう ねん ぎ ふ にちにちしんぶんはつこう ひがししらかわはつてんごう ひがししらかわはつけい
大正8年、岐阜日日新聞発行の東白川発展号で、東白川八景に
せんてい
選定されているポイントのひとつ。五加の南北橋付近の景勝を指
しているが、この辺りは別名「白川寝覚め」ともいわれ、奇岩の景
しょうち
勝地だ。

へきたん
碧潭とは、あおあおとした深い淵のことをいうが、淵の多い
ひがししらかわ
東白川の中でも、そのあおさが一段と鮮やかなことから、この長淵
えら
が選ばれたものらしい。



これも大正8年、岐阜日日新聞発行の東白川発展号で、東白川八景に選定されているポイントのひとつ。五加と神土の境にある不動滝付近をいう。

清漣というのは、清らかなさざ波という意味の言葉であり、滝の水の清さから選定したものらしい。なお、東白川八景には、ほかに、「池の島の眺望」「猿岩の青嵐」「白川橋の清流」「釜淵の弁天」「生紫の飛漠」が上げられている。



久須見の峠道は昔から塩などの生活物資を運ぶ、人通りの多い道であった。ここに五介という山賊の親分が住みついており、道ゆく人々をたいそう困らせていたそうな。この話を耳にした殿様は、さっそく五介退治の命を鉄砲の名手・又衛門に下した。ところが、又衛門が五介のかくれ家を探して峠にさしかかるたびに五介はどこかに雲隠れしてしまい、なかなか姿を現さなかった。

そこで又衛門は五介の手下を捕まえて五介の居所を白状させることにした。それによると五介は滝壺の奥にこっそりと潜んでいるということじゃった。そんなこととはつゆ知らず、滝壺の奥に隠れながらのんびり酒を酌み交わしていた五介。さすがの五介も又衛門の急襲にはかなわず、哀れ最期をとげたのだそうな。

さて、五介退治を果たして意気揚々と引き上げた又衛門であったが、不思議なことにあれほど名手と謳われていたにもかかわらず、このとき以来、鉄砲はからきし当たらなくなってしまったそうじゃ。

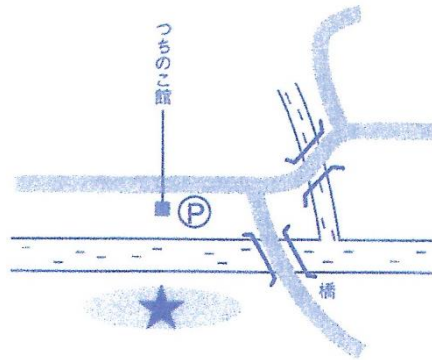


ひがししらかわむら しんめいしよ やかた うらて やま あき
東白川村の新名所「つちのこ館」の裏手の山は、秋になるとそ
れはそれは見事に彩られる。

- 8 -

たいしやう ねん とうじ ぎ ふ にちにちしんぶん はつこう ひがししらかわはつてんどう
大正8年に当時の岐阜日日新聞が発行した東白川発展号なる
新聞に東白川の名勝地として「東白川八景」を選定しているが、
そのひとつにこの地の紅葉が上げられている。

やま しゃめん きゆうしゆん げんざい ひと て
山の斜面があまりにも急峻なため、現在も人の手がいれられず、
自然のままの姿が保たれている。



ひがししらかわむらやくば まえ よつ わ な む あ み だ ぶ つ ひ
東白川村役場の前に四つに割れた南無阿弥陀仏の碑がある。
てんぼう ねん とうじ ち じやうらくじ さんもん た みやうごうとう
天保6年、当時この地にあった常楽寺の山門に建てられた名号塔
だ。

とう めいじしよき はいぶつきやく さい う こわ めい
この塔には、明治初期の廃仏毀釈の際には打ち壊しの命がくださ
れたが、その任にあたった信州高遠の石工・伝造は思いあってこ
れを四つに割り、近くの田んぼの石垣などに隠していた。

ご きんねん むら えきびやう きやうさく つづ
その後、近年になって村に疫病や凶作が続いたことがあったが、
その時にこれを掘り出して再建。現在の姿となっている。
ひがししらかわむら はいぶつきやく きび てつてい おこな
東白川村の廃仏毀釈がいかに厳しく徹底して行われたのかを
よじつ ものがた きちやう しょうこぶつ
如実に物語る貴重な証拠物でもある。

ほ な む あ み だ ぶ つ も じ ひ と も じ こめいしやう はい
彫られている南無阿弥陀仏の文字には、一文字で米一升が入る
といわれ、別名一升様とも呼ばれている。



神土から白川町の黒川にぬける道は昔からたくさんの人や荷馬車が往来した重要な道であった。ただ、道幅が狭いうえに、すぐ脇を流れる佐広川をジグザグに渡りながら登っていく難儀な道だったそうだ。

あるとき、土地の百姓が三才馬を引きながらこの道を通り、佐広川を渡ろうとしたその瞬間、馬が流れに足を取られて大きな淵に落ち込んでしまった。馬はあがき、百姓は手綱を懸命に引いたがどうしても岸に上げることができない。どれくらいの時が経ったろうか。助けになる通行人もなく、ついに力つきて馬は淵に姿を消してしまったのだそうだ。このときから、誰ともいわずこの淵をさんざいぶち三才淵とよぶようになったのだそうだ。

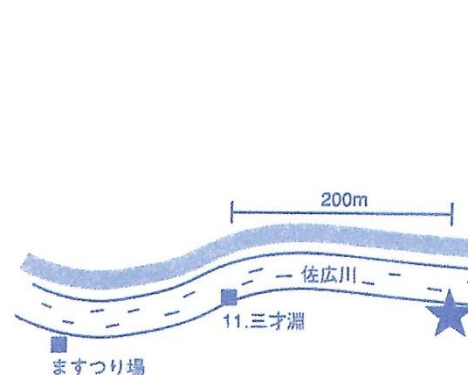
この淵は、大きな一枚岩が長い間の水の浸食で掘り下げられたためずらしい地形である。



子どもの柔軟な頭というのは、ときにユニークな発想をする。山や岩、樹木など、おもしろい形のものをみつけては自分たちで名前を付けて遊んでいる姿をみかけることがあるが、その観察力の鋭さには感心させられる。

東白川村内は自然が豊富で、そうした対象にはこと欠かない。このおもしろポイントでも取り上げている傘岩のほか、戦車岩、烏帽子岩…なかでも神土の佐広谷にあるこの岩は、現物を目にしたことのある人ならすぐにピンと来たはず。誰かのイタズラか、小さな石が乗せられていて、それが目となって一段とリアルさを増し、見る者を美にほのぼのとした気分になさせてくれる。

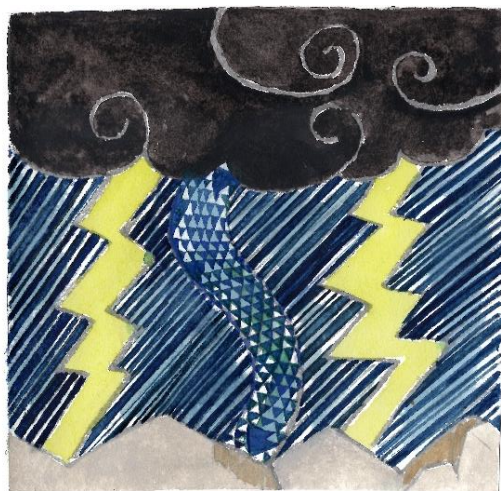
いかがですか。あなたもなにか見つけて名前を付けてみては。



大昔のこと、それはそれは暑い夏だったそう。幾日も幾日も日照りが続き、これ以上雨が降らないと、田んぼの稲や畑の作物がみんな枯れてしまうというところまで追い込まれ、村の百姓衆は庄屋さまのところに集まって、あれやこれやと思案したそう。そうはいってもお天道さまばかりは誰にも手出しができない。結局、なんの名案も見つけ出せないままに日が暮れてしまい、百姓衆はうちしおれてそれぞれの家に帰っていった。

その夜のことであった。庄屋さまの夢枕に御仏様が現れなさって、佐広谷の淵の川砂利を田んぼに運び雨乞いの祈りを捧げよ、とお告げになった。夜が明けると庄屋さまはさっそく百姓衆を集めてお告げにしたがって一心不乱に雨乞いをしたそう。何度も何度も空を見上げながら、お祈りは夕方まで続けられた。

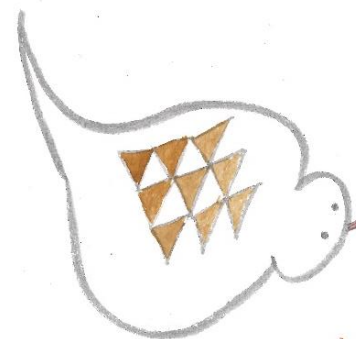
みなの人々に疲れが見えはじめ、やっぱりだめかと諦めかけたときであった。空がにわかにかき曇り、激しい雷鳴がとどろくとともに、砂利をすくった淵から竜が現れた。竜はお祈りをする村の人々をギロリとにらむと一直線に真黒な空に昇っていった。と、その途端であった。ザーッと、いうはげしい音とともに大粒の雨が降りだしたんだ。このとき以来、この淵を竜宮淵と呼ぶようになり、日照りが続く人々はこの淵に来て雨乞いの祈りを捧げるようになったそう。



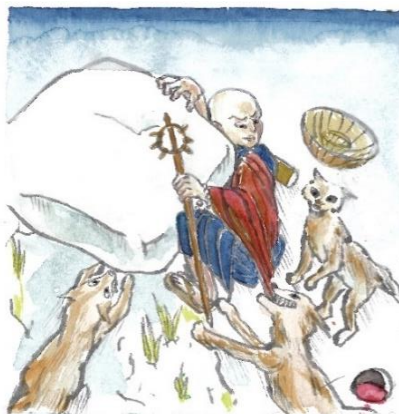
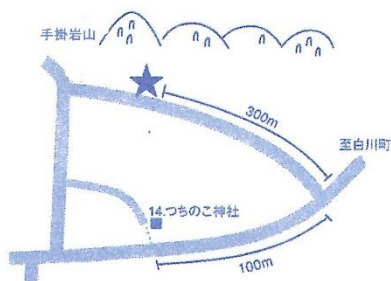
東白川村は、全国でも屈指の“つちのこ”の棲息地だ(といわれている)。現に「つちのこを目撃した」という人もたくさんおり、マスコミにもしばしば取り上げられている。

その中のひとり、安江重利さんが、昔、木を切っていたときに、倒れた木の下敷きになって死んだ“つちのこ”を穴に埋めたことを思い出し、その辺りを掘り返してみた。埋めてから年数が経ってしまっていたが、安江さんが埋めたという場所の土をご神体に、1990年につちのこ神社が祀られた。

毎年5月3日には村をあげて「つちのこ大搜索」イベントが開催されているが、これに合わせてこの神社のお祭りが行われている。



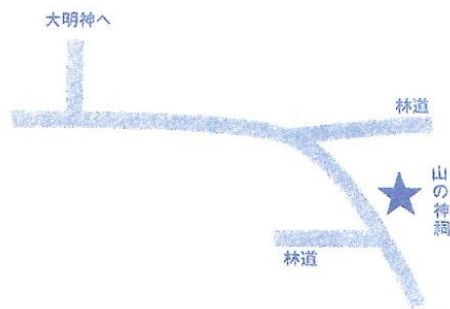
かんど しもおやだ て かけいわやま すその おお いわ
 神土・下親田にある手掛岩山の裾野に大きな岩がひとつだけゴロンと横たわっている。よく見てみるとどこことなく傘に似ていることから、いつの日からか村の人たちはこれを傘岩と呼ぶようになった。なんの変哲もないただの岩のようであるが、実はこの岩、大変な曰く因縁のある岩なのだ。平安時代の初めごろのこと。諸国を行脚していた弘法様がこの地を通りかかったところちょうど夕暮れ時になってしまい、暗くなりかけた山道で数匹の狼に襲われてしまった。弘法様の行く手には大きな傘岩が立ちちはだかる。逃げ場を失い絶体絶命に追い込まれた弘法様は、とっさにこの傘岩に足をかけると渾身の力を振り絞ってよじ登り手掛岩山に逃れたのだそうだ。げんざいかさいわ へこ とき こうぼうさま あしあと て かけ
 現在傘岩に見られる凹みは、その時の弘法様の足跡だという。手掛岩山 ちょうじょう て
 岩山の頂上にはこのとき弘法様が手をかけた岩があり、ここから手掛岩山の名がついたといわれている。それにしても、傘岩に足をのせて山の頂上に手をかけるとは、弘法様の身長は一体どれくらいあったのだろう。



この地方の檜は、「東農ひのき」と呼ばれ、昔からたいへんに価値の高いものとされている。このお金になる檜や杉、そして日々の暮らしに必要な燃料や食料の供給源である山は、村人たちにとって大切な財産であり、生活の場でもあった。

村には昔からこうした山で働く人が多く、そのため山の作業の無事を祈って山の幸に感謝する信仰が始まった。山の神を対象とするこの信仰は「山の講」と呼ばれ、毎年2月7日と11月7日がその日とされている。「山の講」の日には仕事を休みお祭りを行う風習がある。

ちなみに、山の神は女の神様で、山の講の日に女性が山にはいると嫉妬して山が荒れるといわれている。



かんど かみおや だ しんめいじんじゃけいだい すぎ ろうたいぼく ふる
神土・上親田の神明神社境内に杉の老木がある。そんなに古い
はなし しょうわ ねんごろ おお たいふう み ま おおすぎ
話ではないが、昭和の20年頃に大きな台風に見舞われ、この大杉
えだ お うえはんぶん か
の枝が折れてしまい、上半分が枯れそうになってしまった。

じんじゃ けいだい きんじょ こ あそ き
神社の境内は近所の子もたちもよく遊びに来ており、このまま
ほう おお あぶ うじこちゅう あつ すぎ き たお
放っておくと危ないので氏子中が集まり、この杉を切り倒すことに
き 決めたのだそうだ。その日以後、組中の家々に病人やけが人が
ぞくしゅつ たいへんな騒ぎになってしまった。

え な こおり なだか きとうし うらな
そこで、恵那の郡の名高い祈祷師に占ってもらったところ、こ
おおすぎ たた くみ おおすぎ き たお
この大杉の祟りだというではないか。組ではさっそく大杉を切り倒す
はなし と ていちょう はら
という話を取りやめにし、丁重にお祓いをしてもらった。やがて
びょうき ね こ ひと げんき
病氣やけがで寝込んでいた人たちもすっかり元気になったのだそ

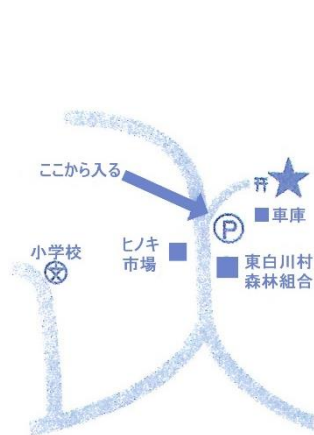
うだ。このすぎ たいぼく
までも神社の境内に残っ
ていて、ねもと ふたまた
根元から二股に
なった幹は、いっぽう か
一方が枯れたようになっているが、
えだ にはまだあおあおと葉
しげ
が茂っている。



むかしまえ ひとびと りんや ねんりょう ひりょう しりょう え く
ひと昔前まで、人々は林野から燃料や肥料、飼料などを得て暮
らしを営んでいた。そして、みず きょうほう ねん ひとびと まいにち
なくてはならなかった林野への入会権をめぐる争いがおこり、多
くの村人が生活に苦しむこととなった。

このきゅうじょう う やぶ
この窮状を打破するにはもはや幕府に直訴するよりてだては
ない。ある日の朝早く、まだ陽がのぼる前にひそかに江戸表に向け
たびだ ふたり むらびと すがた
て旅立つ二人の村人の姿があった。ところがどこから漏れ知れた
のか、まもなく二人が役人に捕えられ境谷で打ち首になる、とい
うしらせが村人の耳に届いた。すわ一大事。集まった村人たちは
おおいそ さかいだに か とき おそ ふたり くび
大急ぎで境谷に駆けつけたが、時すでに遅し。二人の首ははねら
れてしまっていたという。

ごじつ むらびと くよう た ひ ときどきはな そな
後日、村人が供養のために建てた碑があり、時々花が供えられて
いる。



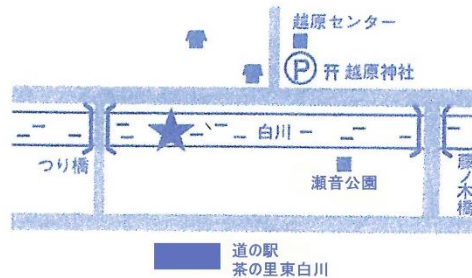
19 こうぼうさま あしあと 弘法様の足跡 Part II (日向地区)



伝説

越原・日向の越原神社下手を流れる白川の真ん中に大きな岩がある。この岩には大きな草履の跡のような模様が刻まれており、大昔、天狗がこの岩に足をかけて手掛岩山に登ったとも、弘法様がこの岩に足をかけて登ったともいわれている。

この岩の付近はいまではだいぶ埋まっているが、つい20～30年ほど前までは大きな淵になっていたそうだ。



20 くろぶち せきぞうぶつぐん 黒淵の石造物群 (黒淵地区)



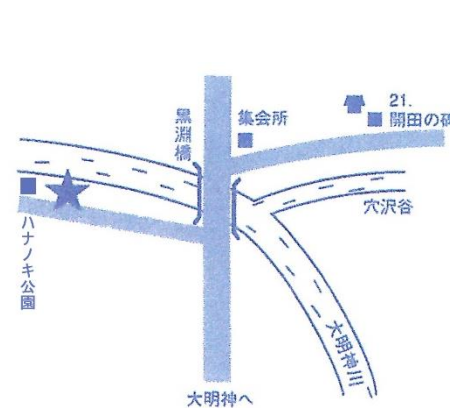
石碑

歴史
伝承

昔から信仰の対象となっている石造物は村のあちこちで見かけることができるが、この越原・黒淵の石造物群のように数種類の石造物を一か所に集めて信仰を行っているケースは珍しく、村の史跡にも指定されている。

中央にある石灯籠には「伊勢講」「大神宮」「金毘羅山」「秋葉山」の文字が刻まれており、隣の「二十三夜塔」は、なかなか治らない病を治すためにここに祭壇を設け、お神酒を捧げて祈ったものらしい。二十三夜はなかなか月がのぼらない日であり、月がのぼる午前二時ごろまでは座ったり腰掛けたりすることが禁じられた。

余談ではあるが、この前の淵を「くろぶち」といい、これがそのまま地名になったものだろうといわれている。



くろぶちにある民家の庭先。一見庭石と見間違えてしまいそうになるが、よく見ると何やら文字を刻んだ石がいくつか見られる。ほとんどが風化によって判読しにくくなっているが、そのなかのひとつに「田ひらく 寛文5年」とはっきり読み取れるものがある。この土地を開墾した人が、田んぼのなかにあった自然石を記念として刻んだものと考えられる。

寛文5年といえはいまから360年ほど前で、五加の蟠龍寺が再興された年だとされている。東白川村に残る石造物のなかではもっとも古いものだということになる。



大明神の弘法様に「南無阿弥陀仏」の文字を刻んだ高さ2mほどの石碑がある。その左下を見ると「播隆書」の文字が読み取れるが、これは伝え聞くとところによると、どうやら槍ヶ岳の開祖・播隆上人のことらしい。

この石碑は廃仏毀釈の際に、前を流れる谷川に名号が刻まれた側を下に伏せて渡り石として隠されていたが、谷川が氾濫する度に名号が上向きになったので、密かに川岸に引き上げられ、現在地に再建されて供養されている。毎年3月21日にはお祭が行われている。



だいみょうじん こまもりじんじゃ うらやま つけち つう きゅうどう みち
 大明神・子護神社の裏山に付知に通じる旧道がある。その道
 わき ちよっけい いわ むかし ひとびと ぜにいわ よ
 の脇に直径2mほどの岩があり、昔から人々に銭岩と呼ばれてい
 る。

ぜにいわ ま なか よこ いっぱん わ め なか どうたい
 銭岩には真ん中に横に一本の割れ目があり、その中にはただ胴体
 だけで頭や尾がなく、銭形の模様をした蛇が棲んでいたという言
 つた ぜにいわ ゆらい へび す い
 い伝えがあり、これが銭岩の由来らしい。ただ、この蛇が姿を現
 きょうじ むらびと おそ
 すと凶事がおこると村人たちは恐れていた。

とし へび ひさ そと むらざと お
 ある時のこと、この蛇が久しぶりに外にでて、村里まで下りてき
 たことがあったそう。するとこの年、村は大凶作に見舞われ、
 ひとびと むら はな むじん ち
 人々が村を離れて無人の地となってしまったという。

ねん あたら むらびと ち かいこん
 1715年に新しい村人がやってきてこの地を開墾したときにこ
 ぜにいわ はっけん にようぼう さん ちか
 の銭岩を発見し、ちょうど女房のお産が近づいていたこともあつ
 あんざん かみさま あが まい
 て、安産の神様と崇め、お参りしたと
 こまもりじんじゃ
 いう。これがもとになって子護神社
 まつ ち ぜにがみ よ
 が祀られ、この地を銭神と呼ぶよう
 になったのだそうだ。

ぜにがみ ぜにいわ あんざん かねも
 銭神の銭岩。安産よりもお金持ち
 かみさま ほう なまえ
 の神様の方をイメージしそうな名前
 だけれど、そちらの方の霊験は？
 こんど まい
 今度お参りしてみたらいかがかな。



1995年3月31日 初版発行
 2025年5月30日 改訂

発行 東白川村役場
 TEL 0574-78-3111